山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

第34号
令和元年11月29日

山口県立大学
# 郷土文学資料センターだより

## 故和田健氏資料の共同研究について

上　野　浩　和（山口市交流創造部文化交流課課長）

故和田健氏は、其中庵・風来居在住時代の種田山頭火と親交を結び、中原中也の没後いち早くその遺稿を紹介するなど、本市ばかりでなく山口県に縁のある文学者等と交流する一方で、詩集のほか、『山頭火よもやま話』や『山口県近代文学年表』、『防長文学散歩』など山口県の文学に関する著作を多く残し、詩人・郷土文学研究家として高く評価されているところである。

資料搬入の様子

和田健氏は平成25（2013）年に98歳で永眠された。その後、市と山口県立大学では、御遺族ならびに関係機関と協議を進めた結果、貴重な資料の保全が必要であること、また、故人に係る資料の研究を進め、その成果を市民や地域に還元していくことは、故和田健氏の顕彰や他の文学者等の研究にもつながると考えられることから、両者の共同による取組を進めることとし、昨年度末に御遺族から、山口県立大学に対して、資料の御寄贈が行われたところである。

本市としては、雑誌「詩園」における中原中也の遺稿掲載など、中原中也研究の先駆的な取組をされるとともに、中原家とも親交のあった故和田健氏の研究を進めることで、中原中也研究の更なる進展を期待しているところである。

昨年度は、数回にわたって故和田健氏の自宅に訪問し、貴重な所蔵資料を見させていただいた。しかしながら、書棚や部屋に所狭しと置かれていた資料は、少なくとも1,000点以上はあったことから、自宅での確認は断念し、山口県立大学に寄贈された後に、目録の作成など、資料の調査研究と利活用を進めていくこととした。

その後、昨年度末の平成31（2019）年3月25日に、故和田健氏の自宅から資料を搬出し、山口県立大学に搬入した。その数は、ダンボールにして約200箱。搬入した山口県立大学内の広い部屋は、ダンボール箱であっさり埋まってしまった。

以降、山口県立大学の加藤准教授、中原中也記念館の中原館長を中心に、中原中也記念館学芸担当職員と数人の学生アルバイトを加えた体制で、週に1日の作業日を設け、資料の整理、分類と目録化のための作業を進めている。

資料調査の様子

今後も資料の調査研究を進めていく中で、故和田健氏の功績を明らかにするとともに、研究成果を市内外に広く地域社会に向けて発信することで、本市における郷土文学を中心とした地域資源の更なる活用を図っていきたいと考えている。

なお、故人の没後10年にあたる令和5（2023）年度中には、共同での調査研究事業を完了し、その成果を公表する予定としている。

# 「沸騰する精神」――防府ゆかりの詩人・上田敏雄

池　田　　誠（中原中也記念館学芸担当主任）

1900（明治33）年に山口県吉敷郡大道村（現・防府市大字台道）の大地主の四男として生まれた上田敏雄は、山口中学校を卒業後、上京し慶応義塾大学予科に入学します。25（大正14）年には、萩原朔太郎の推薦により、雑誌「日本詩人」に詩が掲載され、詩壇デビューを果たします。

上田展展示風景

26年、当時在学していた慶応義塾大学文学部に、英国留学から帰国して間もない詩人の西脇順三郎が教授として就任。西脇を通じて西欧の最新芸術の知識を身につけます。27年（昭和2）年に慶応義塾大学文学部英文科を卒業。翌年1月には日本初のシュルレアリスム宣言「A NOTE DECEMBER 1927」を発表、英訳はパリのシュルレアリストたちへも送られました。同年9月に「詩と詩論」、11月には「衣裳の太陽」が創刊され、いずれの雑誌にも創刊同人として参画した上田は、これらの雑誌に次々と作品を発表、シュルレアリスムの旗手としての存在を確かなものにしていきます。

上田展チラシ

そして29年、第一詩集『仮説の運動』を厚生閣書店より刊行し詩壇の注目を集めます。31年に東京外国語学校（現・東京外国語大学）専修科仏語に入学、同級生に中原中也がいました。この頃から作品の発表が急激に減り、沈黙期に入ります。34年、東京高等工学校（現・芝浦工業大学）の英語教員となりましたが、45年3月、職を辞し故郷に疎開、終戦を迎えます。

上田が再び作品を発表し始めるのは48年頃からです。40年代から50年代はキリスト教や社会主義思想に基づいた作品を様々なスタイルで書いています。この頃上田は、昭和初期に自身が行った詩的実験を否定し、『仮説の運動』を著作目録から削除すると宣言します。その後も故郷の防府にとどまり、教員として山口大学に勤務するかたわら、有志の学生らとともに同人誌を発行。また、全国誌などにも勢力的に発表しました。62年には宇部工業高等専門学校の教員となります。66年には第二詩集『薔薇物語』を昭森社より刊行。その後は、カトリックの世界観を土台にしながら、さらに進化した新世界をつくりあげる詩想へと展開していきます。そして晩年には詩と評論とが渾然一体となった独創的な作品が発表されるようになります。82年3月30日に老衰のため81歳で亡くなるまで〈仮説〉の精神を失うことなく、常に新境地を求めた詩人でした。

上田敏雄肖像（『仮説の運動』口絵写真）

中原中也記念館では2019（平成31）年4月17日から7月28日まで、企画展「沸騰する精神――詩人・上田敏雄」を開催しました。本展では、上田の詩稿や書簡など、初公開の直筆資料をはじめ、詩集、掲載誌などを一堂に会し、上田の詩業を紹介しました。展示資料のなかで特に注目を浴びたのは、25年頃から27年にかけて創作ノートとして使用されたスクラップブック7冊です。ここで上田は当時の最新芸術の動向を反映した様々な詩的実験を行っています。これだけのバリエーションの詩的実験を継続して行った例は極めて少なく、近代詩史上特筆すべき資料であると言えます。上田自身が表紙に「禁公表」と記していますが、その史的意義を踏まえ、ご遺族の了解をいただき展示しました。

スクラップブック展示の様子

# 『広辞苑』の編者新村出を取り巻く人々と私との出会い

安　光　裕　子（郷土文学資料センター研究員）

やまぐち生まれの新村出（しんむらいづる）を研究するきっかけとなったのは、花田佳子氏（元周南市立中央図書館長）から平成19年度徳山大学地域文化講座の講師を依頼されたことにある。その後、『やまぐちの文学者たち』（平成25年2月刊行）の増補版に新村出が選ばれ、その執筆者として私が指名されたことが、新村出研究をさらに進める機会となった。

その原稿執筆のために、平成24年3月26日に「新村出記念財団　重山文庫（以下、「重山文庫」とする。）」を初めて訪問した。新村祐一郎氏（新村の孫）と入江貞子氏（重山文庫前嘱託職員）が温かく迎えてくださったことを今でもよく覚えている。その時から、年に2、3度のペースで重山文庫を訪ねている。重山文庫の庭には一本の泰山木がある。新村出は、泰山木をこよなく愛し、入江氏からは、「晩年病床にあった新村出先生は、縁側まで移動させて、白い花をつけた泰山木を眺めていらっしゃった」との証言を得るとともに、新村出の直筆短冊「老樹頌　わが庭にかくも多くかつ咲き續けたる泰山木の花　重山」などを譲り受けた。

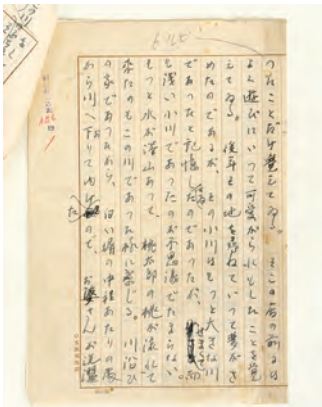
平成26年7月26日に重山文庫に出向いた折、岩倉具忠氏（岩倉具視の孫）に遭遇した。その時の岩倉氏との出会いが、同年11月6日に、霞会館で開催された岩倉具視公生誕130周年記念パーティーへの招待となり、大久保利通の末裔など100人以上が参集するなかで、新村恭氏（新村出の孫、現在、重山文庫の代表）との出会いにつながったのである。それ以来、新村恭氏とは、新村出ゆかりの場所（やまぐち）を案内したり、新村恭著『広辞苑はなぜ生れたか 新村出の生きた軌跡』（世界思想社、平成29年）の書評（『図書新聞』3348号、平成30年4月）を執筆したりするなど、親交を深めている。

平成24年から3箇年、後藤嘉宏筑波大学教授（研究代表）の科学研究費で中井正一に関する研究を行った。後藤教授と共に、平成26年9月4日に、町田市で新村佳代子氏（新村出の孫徹氏の夫人、中井の娘）に、同年9月28日に、名古屋市で原夏子氏（新村出の孫）にインタビュー調査を実施した。その結果、新村猛氏（新村出の次男）と中井は、ともに治安維持法違反の容疑で検挙されたことや、中井の娘である佳代子氏が新村徹氏（新村出の長男）に嫁いだことなどの詳細が明らかとなった。

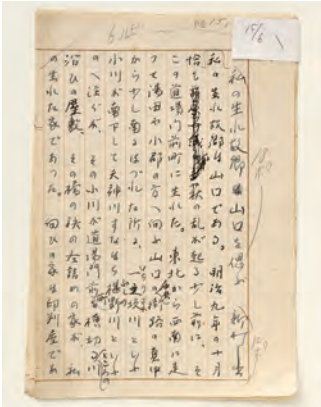
最後になるが、私にとっては、あの国民的辞書である『広辞苑』の編者新村出は遠い存在であった。しかし、新村出とやまぐちとの関係を調べるうちに、新村出の自筆原稿と出会い、その出会いが研究を後押しした。その自筆原稿は、「私の生れ故郷山口を偲ぶ」（『婦人之友』第34巻第6號（昭和15年））の「私の郷里」）に掲載された記事の元になる原稿である。雑誌は入手していたが、自筆原稿は空襲で焼失してしまったと思い込んでいた。一縷の望みで出版元に電話をかけたみたところ、婦人之友社に所蔵されていて、一部欠損しているものの保存状態が良いことがわかった。新村出の自筆原稿との奇跡的な出会いとなった（写真①、写真②、写真③ 自筆原稿の写真の掲載については、婦人之友社に許諾を得ている。）。

以上、『広辞苑』の編者新村出を取り巻く人々と私との出会いをふりかえることで、偶然が偶然を呼び、つながり、それが新村出研究の原動力となっていることをあらためて実感したしだいである。なお、文学者としての新村出については、『山口県立大学学術情報』第10号（『国際文化学部紀要』第23号2017年55-65頁）に著している。

『婦人之友』の原稿写真③



『婦人之友』の原稿写真②



『婦人之友』の原稿写真①

## 寄贈図書（2019年5月～2019年10月）

三野公子『句集　八重桜』、河村正浩『句集　春夢』、中原中也記念館『特別企画展　富永太郎と中原中也』、浜崎勢津子『桐』『帰宅』、平川扶久美『句集　春の楽器』、藤井康文『句集　枇杷の花』、やまぐち文学回廊構想推進協議会『やまぐちの文学者たち　追補版』『やまぐちの文学者たち　ダイジェスト版100』、若月保治『近松浄瑠璃の本質と綜合美的研究』（下巻）

## 寄贈雑誌（2019年5月～2019年10月））

『大内文化探訪』第37号（大内文化探訪会）、『其桃』第893～898号（「其桃」発行所）、『研究所年報』第12号（大妻女子大学草稿・テキスト研究所）、『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』第13号（神戸女子大学古典芸能研究センター）、『佐波の里』第47号（防府史談会）、『秋芳町地方文化研究』第55号、『大地通信』第32号（明日を紡ぐ大地の会）、『中原中也研究』第24号（中原中也の会）、『飃』第111号（飃文学会）、『風響樹』第51号（風響樹同人）、『ふるさと通信　きずな』第9号（ふるさと紀行編集部）、『文芸山口』第344～347号（山口県文芸懇話会）、『やまなみ』第36号（やまなみの会）、『山彦』第151～153号（山彦発行所）

私たちは現在、山口県の郷土詩人である和田健先生が所蔵されていた文学資料を、旧2号館にて整理しています。活動内容としましては、書籍情報の入力を中心とした、逐次刊行物の整理や図書の分類などです。扱う資料の多くが、山口県内での文化活動・芸術に関係するものであるため、この活動を通して、より山口県における文化の歩みを実感することができています。また、大正時代の古い図書にも触れる機会があり、とても良い経験となっています。（文化創造学科2年須田優花）

和田健作業風景

## 編集後記

昨年度（平成30年度）末、郷土文学資料センターは、故和田健氏旧蔵資料の寄贈を受けた。よって本号では、山口市交流創造部文化交流課課長の上野浩和氏に、資料の概要と寄贈の経緯についてご執筆いただいた。アルバイトとして整理作業に従事している学生からも文章を寄せてもらった。貴重な資料の寄贈を受け、郷土の資料を整理・保存するという弊センターの本来の業務の重要性をあらためて感じている。

また、同整理作業にも従事されている中原中也記念館の学芸担当主任の池田誠氏には、本年夏、好評を博した展示「沸騰する精神――詩人・上田敏雄」に関連して、上田敏雄の文事と企画展のあらましについて、簡にして要を得たご紹介をいただいた。さらに、弊センター研究員の安光裕子は、山口にゆかりの国語学者・新村出とその遺族とのかかわりについて執筆した。

郷土と資料というつながりで、このような多彩な文学的営みを紹介できたことは、山口県の文化的豊穣を具体的に示すものであり、郷土文学資料センターの歴史的使命について、深く考えさせられる。（菱岡憲司）

山口県立大学
Yamaguchi Prefectural University

■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター（〒753-8502　山口市桜畠3-2-1）
TEL.（083）928-0211　　FAX.（083）928-2251
■発行日：2019（令和元）年11月29日